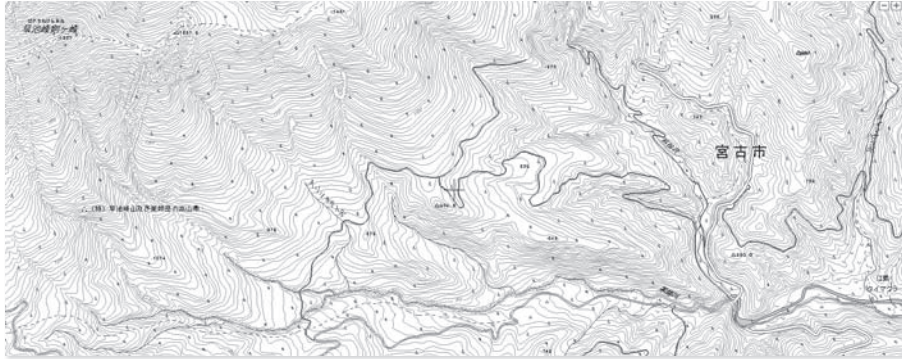


## ■エッセイ

## 早池峰の東麓を訪ねるータイムグラとアンギョカイ沢ー

館長 菊池 慧



国土地理院発行 2万5千分の1地形図幅「高松山」による

国道340号線の江繋<sup>えつなぎ</sup>から西に折れて薬師川に沿って遡<sup>さかのぼ</sup>っていくと、まもなく道路は狭くなって、右に左へと曲がっては上ったり下ったりしながらも早池峰の方角へ徐々に高度を上げていきます。人も車も途絶えてからも久しく走った頃合いにやや開けた場所が現れます。そこがタイムグラです。

薬師川にもう一つの谷川が合流して小さな扇状地をつくり、その緩やかな傾斜地はこんもりとした林となっています。映画にもなった「タイムグラのばあちゃん」はこの地で大自然に身をゆだね、お天道様に感謝して生涯を過ごしたのでした。

タイムグラはアイヌ語の‘タイ・マク’の転訛で“森の奥へと続く道”という意からの命名とされています。ここはまさにそのような佇<sup>ただず</sup>まいです。

しかし、近年の歴史学やDNA遺伝子学の見地からすると、アイヌ人が東北地方に住んでいたという事実はない(下北の海沿いは例外)ことがわかってきました。科学の進歩はアイヌ語に由来すると

考えられていた地名を日本語に求めるよう促していると言えます。

『川井村郷土誌』は、タイムグラを「大麻倉」と表しています。「大麻」は音に合わせた当て字で、‘タイム’と‘グラ’の複合語と考えられます。

‘たいま’の地名は、奈良県葛城市の中にあります。「當麻<sup>たいまんだ</sup>」と書いて国宝當麻曼荼羅<sup>わみょうらい</sup>があることで有名です。背後<sup>ふたかみやま</sup>に二上山を控えていて昔は険しい土地柄だったようです。この「當麻」の地名は、和名類聚抄<sup>わみょうらい</sup>に「多以末」の読みとともに収められていますから平安の中頃にはそう呼ばれています。ところがさらに古い時代の古事記や日本書紀をみると、「當岐麻」「當藝麻」「多耆麻」の漢字を当てて‘たぎま’と呼んでいたことがわかります。もともとは‘たぎま’だった所が、二百年後には‘たいま’と言うようになったのです。

‘たぎま(たいま)’は、「車駕<sup>しゃが</sup>の経ける道狭く、地深浅<sup>たぎたぎ</sup>しかりき。悪しき路の義をとりて当麻といふ。俗云多支多支斯」(常陸国風土記)とあるように、“道が曲

がりくねり、でこぼこで歩きにくい”状態を意味する語で、古語の「たぎたぎし」と同源です。江繋からの道は語義通りだったわけです。

一角が小高くなって広場があります。ここが‘クラ(座)’です。「座」は「天<sup>あま</sup>い<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>くら<sup>ら</sup>」<sup>たかみくら</sup>「磐座」[高御座]のように“一段高いところにある場所”を意味します。

こう解釈すると、タイムグラは徒歩よりすべのなかつた昔の人たちが難儀のあげくに、やっとたどり着いて一息入れる場所だったと想像されます。地元では「宿の平」とも称したとありますから、日帰りが困難な山深い中であって、視界が開け早池峰山を仰ぐことができるありがたい場所だったに違いありません。

先にみたように、‘たいま’は平安時代中頃には使われていた和語です。この時代には山伏などの修験者が往来したことが川井村郷土誌に記されていますから、彼らが命名したのではないかと考えられます。

地図を開くと、タイムグラの西の奥にアンギョカイ沢があります。実に不可解な名称ですが、私はアンニョウカイ(安養界)ではないかと考えています。安養界とは極楽浄土のことです。そうだとするとやはり求道者によって名付けられた、タイムグラと同時代の地名となります。早池峰を聖地と仰いで修行に励む姿が彷彿としてくるようです。

紙数が尽きて根拠を示すことができませんが、想像<sup>たくま</sup>を逞しくするばかりです。

## ■お知らせ 平成23年春の人事異動

## ●転入●

斎藤 邦雄 上席専門学芸員(考古部門)  
〔前:岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課 主任主査〕  
羽柴 直人 専門学芸員(考古部門)  
〔前:(財)岩手県埋蔵文化財センター 文化財専門員〕

## ●転出●

鎌田 勉〔前:主任専門学芸員調査員(考古部門)〕  
現:岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課 主任主査  
木戸口俊子〔前:主任専門学芸員(考古部門)〕  
現:岩手県立大野高校 教諭